

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 11 月 4 日 8:00AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 46,000～52,500 円

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 46,000～48,000 ドル
(S&P500) 6500～7000

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 (ナスダック 100) 24,500～26,500
(ナスダック総合) 22,500～24,000

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 130.000～154.500 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～102.000

エリオット波動とは

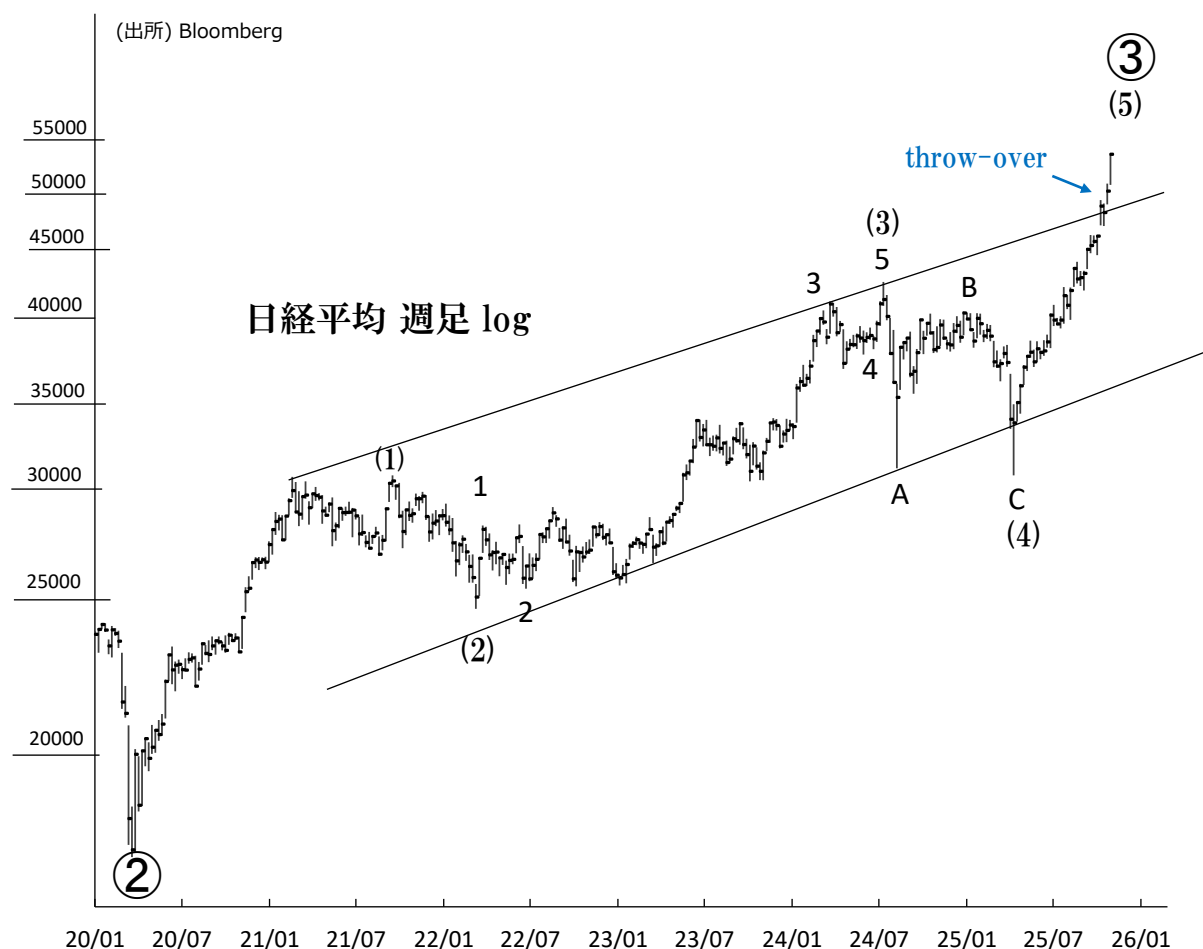
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足 エリオット波動分析】

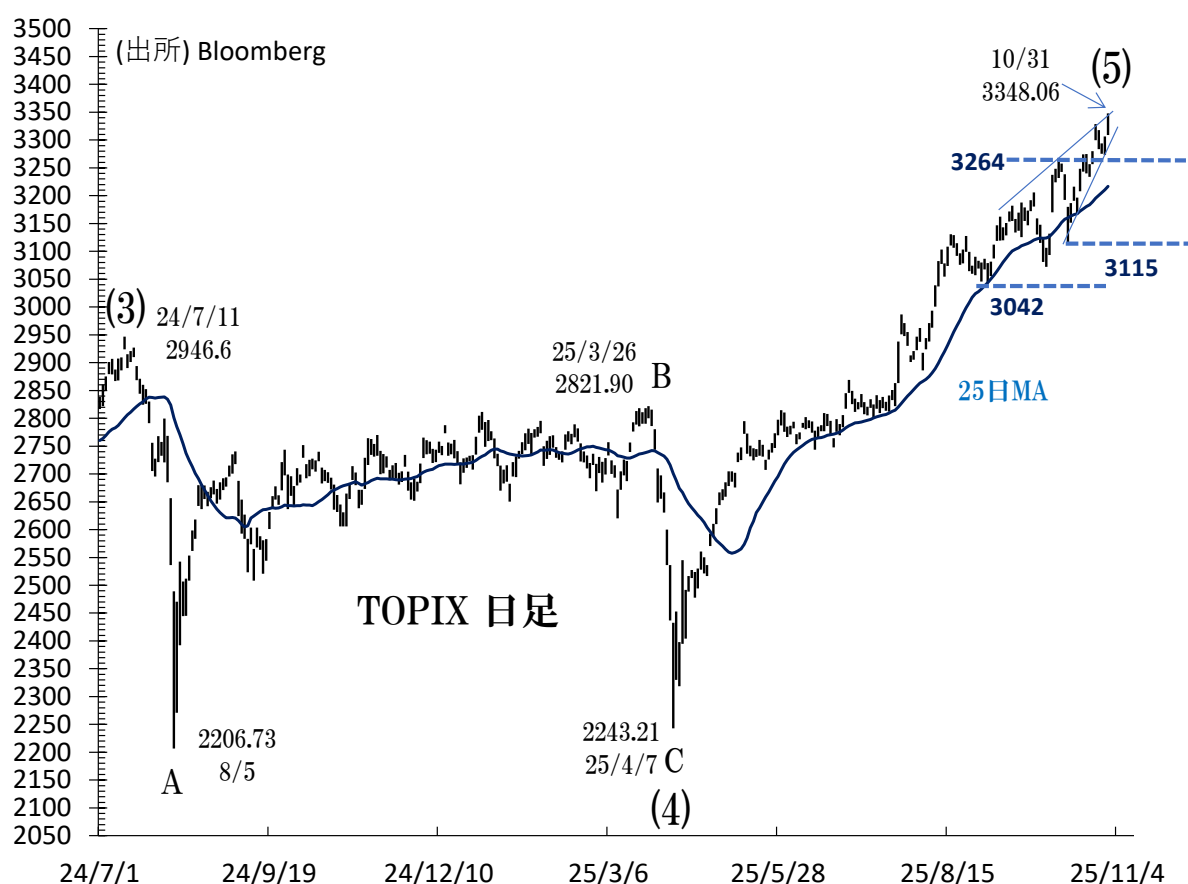
今年 4 月 7 日安値(30,792.74 円)からインターミディエイト級第(5)波の上昇にあり、この第(5)波完成を以て、コロナショック底(16,358.19 円、20 年 3 月)からのプライマリー第③波は完成します。

21 年 2 月以来の上チャネルライン水準(4 万 8000 円)を突破していますが、このような強い動きは、強気相場の最終最後の局面における吹き上がり＝スローオーバー(throw-over)とみられます。

今週は 4 月 7 日週から 30 週目ですが、週次トレンドは半年(26 週)程度で一巡することが珍しくありません。日経平均は短期的にも高値を付ける可能性が高いでしょう。

ひとたびピークアウトとなれば、日経平均は 2026 年 2 月頃※まで下値模索が続きそうです。

※週次サイクルの間隔(安値から安値)は 42 週程度です。これによると、現行サイクルの終了は、今年 4 月 7 週から 42 週程度を経過する 2026 年 2 月頃と想定できます。



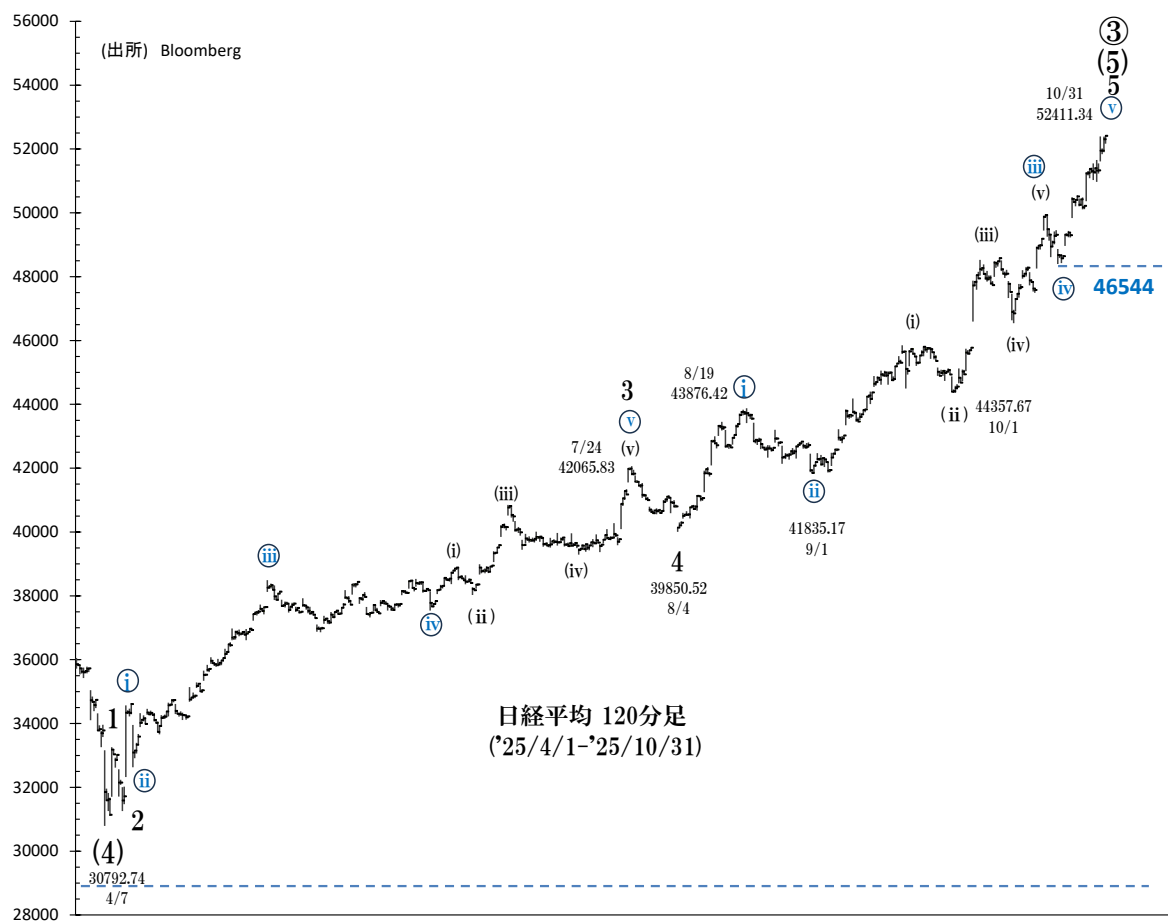
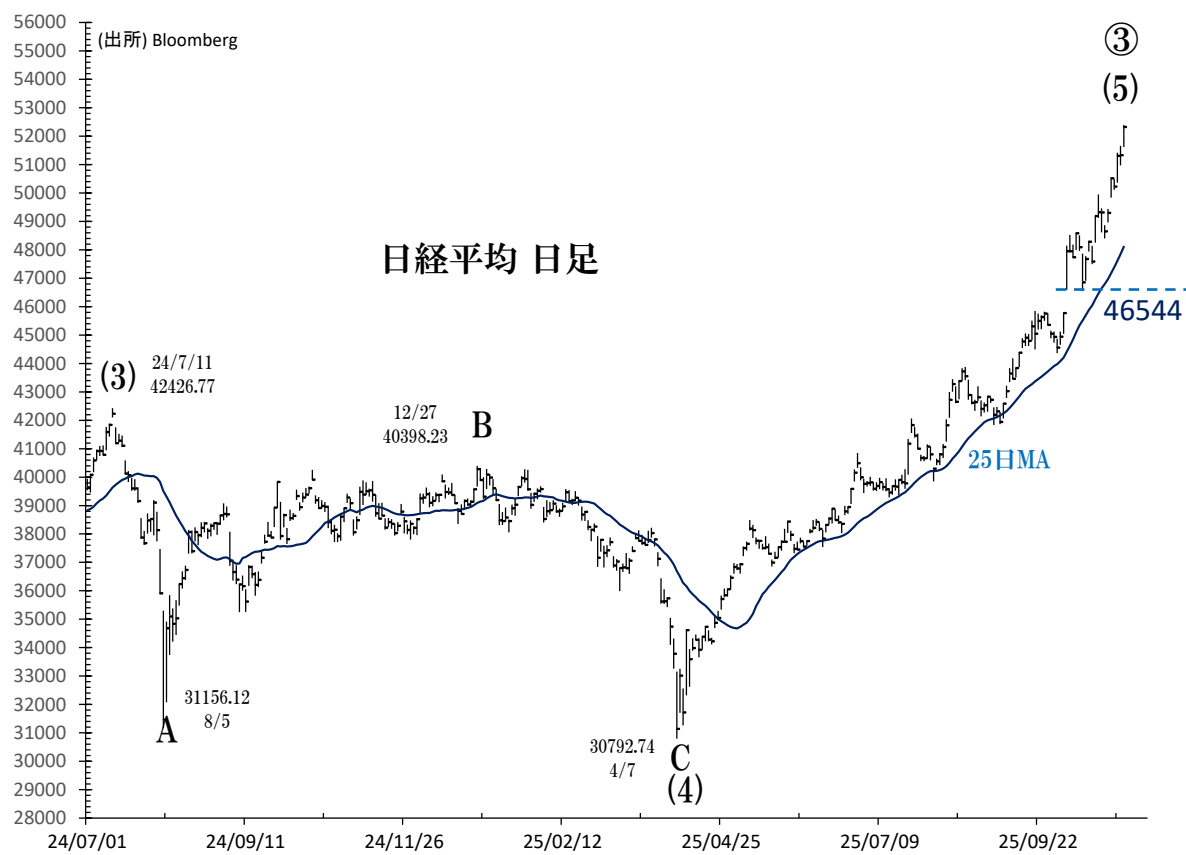
[TOPIX]

10月31日は一時3348まで上昇しました。もっともこの水準は、フィボナッチ比率の目標価格[3323]から0.75%超えるにとどまる誤差範囲といえます。

[3323]…20年3月安値から24年7月高値までの上昇幅、すなわち第(1)波～第(3)波のネット上昇幅と、25年4月からの第(5)波上昇幅が、「1:0.618」になる水準

3042(9/3 安値)からの上昇パターンは、上昇の最終局面に出現する「エンディング・ダイアゴナル」のようです。もしそうであれば、株高の終わりと急激なトレンド下方転換が近いでしょう。

短期的に注目すべきは3264(10/8 高値)というレベルで、それを終値で下回ると、最初の弱気トリガーが発動するでしょう。



[日経平均]

39,850 円(8/4 安値) 以来の上昇はマイナー級・第 5 波です。さらに、46,544 円(10/14 安値) からの上昇は第 5 波中マル v 波に位置付けられます。

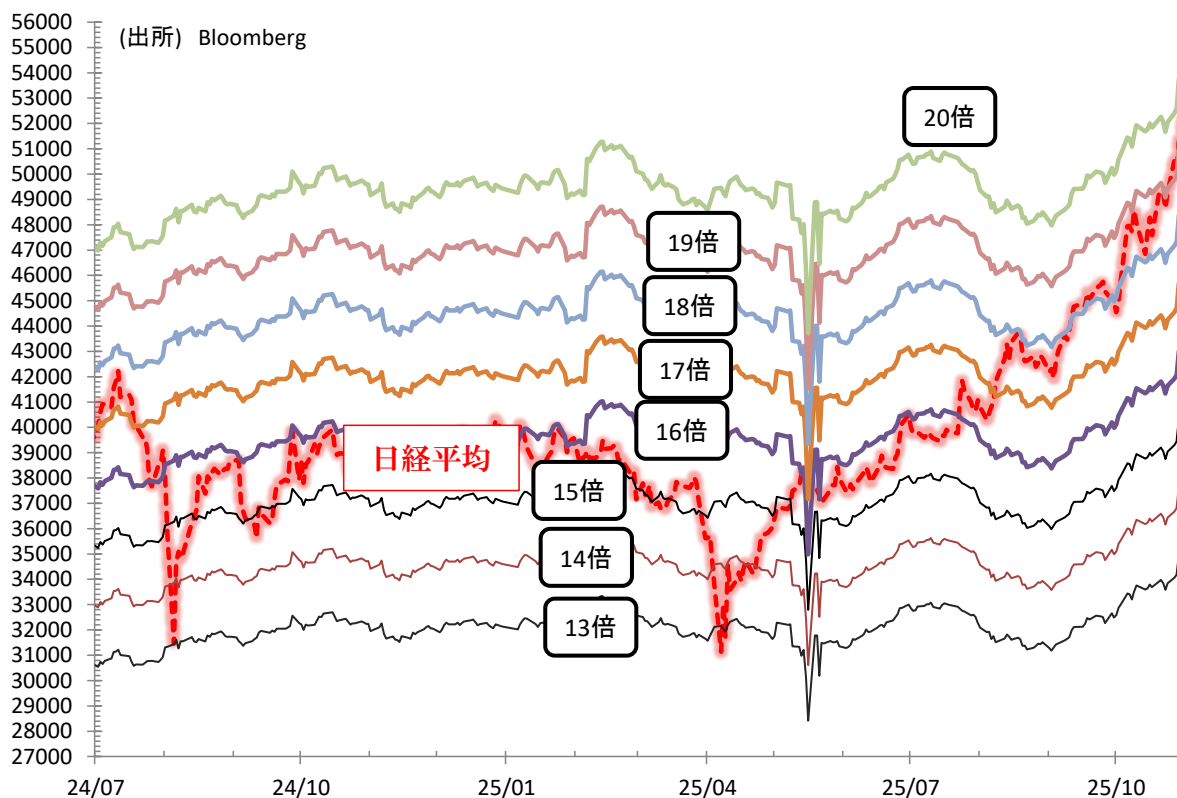
10 月 31 日は週末・月末が重なり大引けに買いが入った模様です。それもあって日経平均は 1085 円上昇、高値引けとなりました。

なおこの日の高値は 52,411 円です。それは、8 月安値(39,850 円) 以来のマイナー級第 5 波の副次波、マル i 波とマル v 波が同じ上昇幅になる水準[52,424 円]をほぼ満たすものでした。

この日、日経平均総合かい離(25 日・75 日・200 日 MA かい離の合計)が 57.7%までさらに拡大しました。この指標からみると、日経平均は 2013 年 5 月以来 **12 年 5 ヶ月ぶりの「株価上がり過ぎ」**です。
遠からず、このような極端な株高に対する反動安が始まる可能性が高いでしょう。

[予想 PER 別の日経平均水準]

10 月 31 日の日経平均予想 PER は 19.66 倍、予想 EPS は 2665 円です。予想 EPS は 10 月 29 日に、過去最高・2687 円まで上がりました。



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ日足 エリオット波動分析】

(プリファード・カウント)

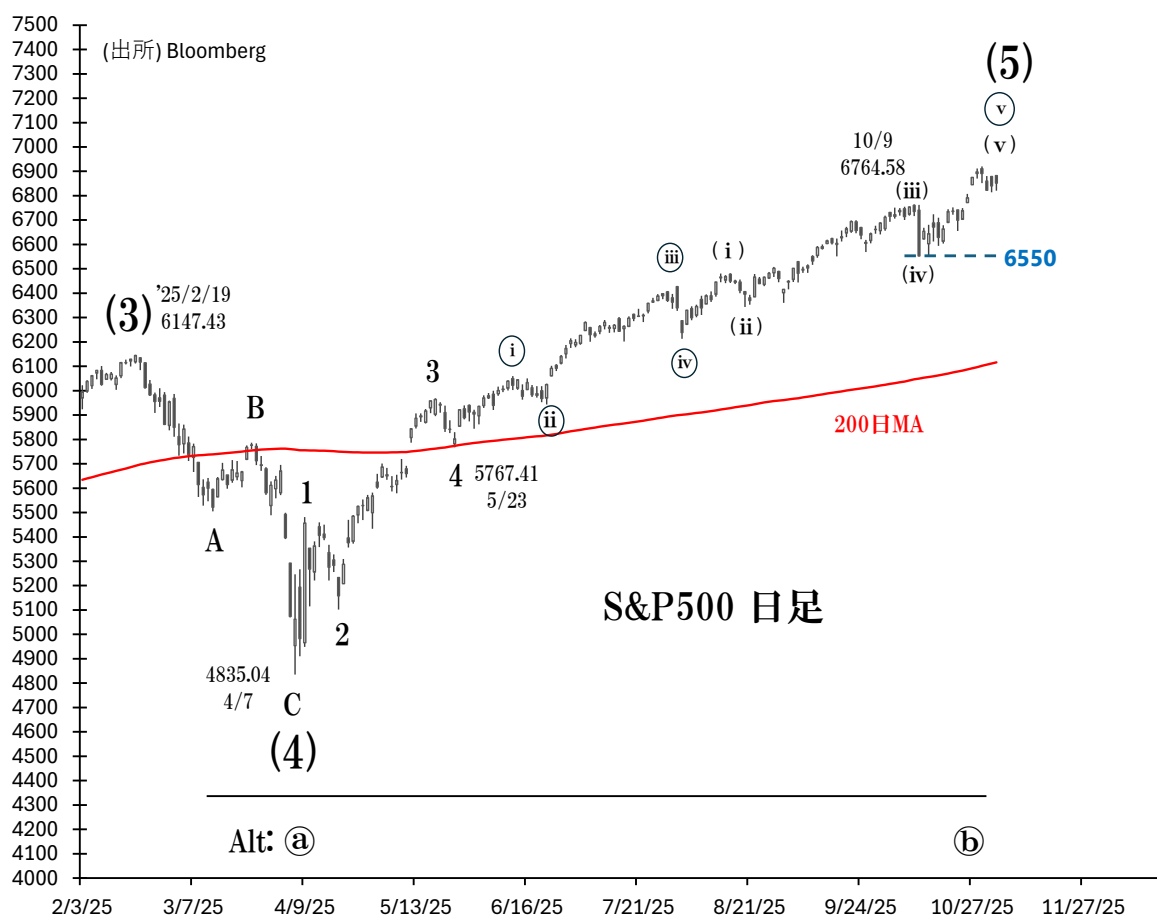
22 年 10 月安値(28,660ドル)からの上昇は、プライマリー級の第⑤波です。今年 4 月安値からの上昇はインターミディエイト級第(5)波に当たり、それを以て第⑤波は終了します。

第⑤波完了後に訪れる弱気相場は、控えめにみても高値から 20%安となるでしょう。

(オルタナティブ・カウント)

4 月からの上昇は「ランニング・トライアングル」における⑥波とカウントされます。このシナリオでは、近々訪れるであろう下げ局面でも 4 月安値(36,611ドル)は維持されるでしょう。その後 1~2 年程度のもみ合いが続いた後に、新たな高値へ向かう展開があるでしょう。

10 月 29 日は一時 48,040ドルと最高値を更新しましたが、その後は弱含みの動きとなっています。11 月 3 日は一時 47,135ドルまで下げ、10 月 27 日に生じたマドを埋めましたが、これは弱気転換の兆しかもしれません。



【S&P500 日足 エリ奥特波動分析】

今年 5 月安値(5767)からの上昇第 5 波は延長し、第 5 波中マル v 波も延長しています(5th wave extension of 5th wave extension)。

10 月 24 日・27 日の連続ギャップを伴う上昇は、強気相場のフィナーレを飾るものかもしれません。

10 月 27 日のギャップ(6807-6843)を埋める下げがあれば、それは最初の弱気シグナルとみることができましょう(10 月 31 日には一時 6814 まで下げています)。

【S&P500 長期エリ奥特波動分析】

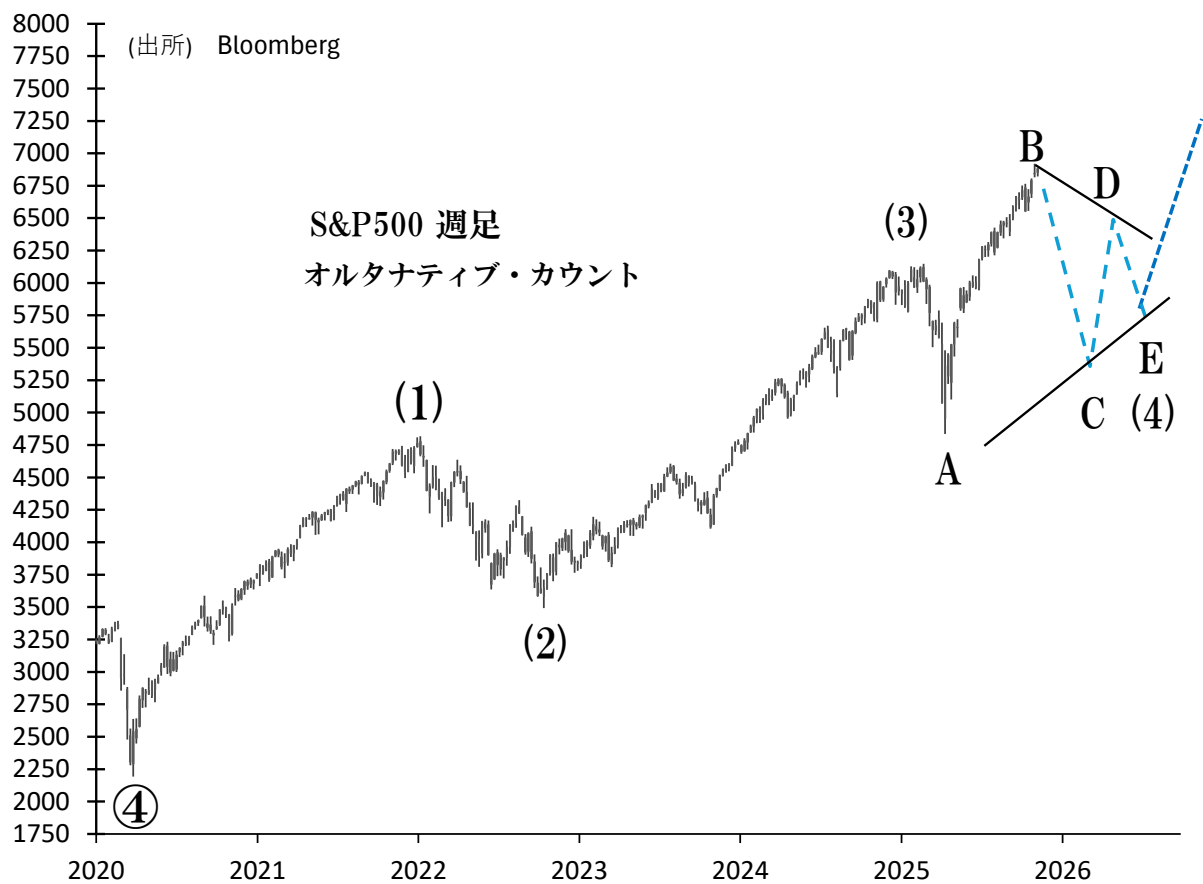
(プリファード・カウント)

4 月安値(4835) からの上昇は、インターミディエイト級第(5)波に位置付けられ、それが終わると長期にわたる調整スタートとなります。それは 4 月安値を大きく下回ることが予想されます。

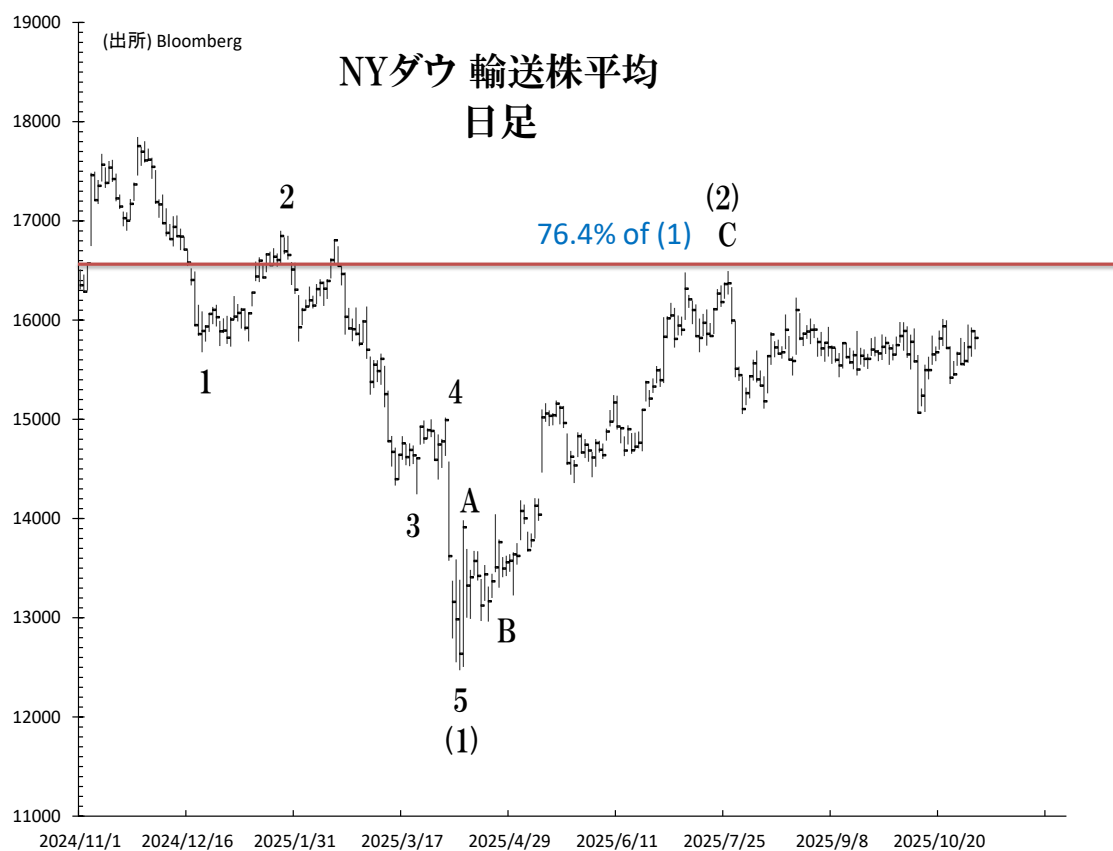
(オルタナティブ・カウント)

4 月からの上昇は、トライアングル中⑥波のリバウンドに位置付けられます。

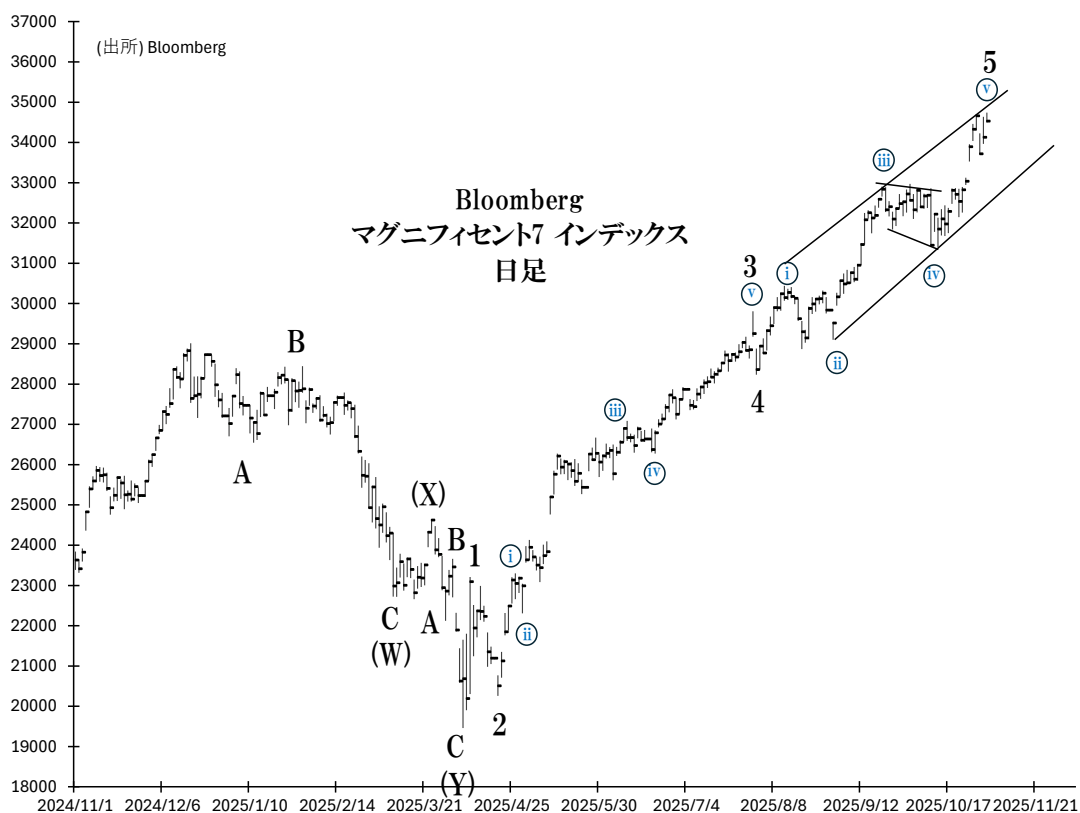
近々⑥波の下げがスタートし、それは②波(2 月～4 月)下げ幅に対し 62%～66%の大きさ(813～866 ポイント)になるでしょう。この⑥波により S&P500 は、5400 を下回る展開になりそうです。



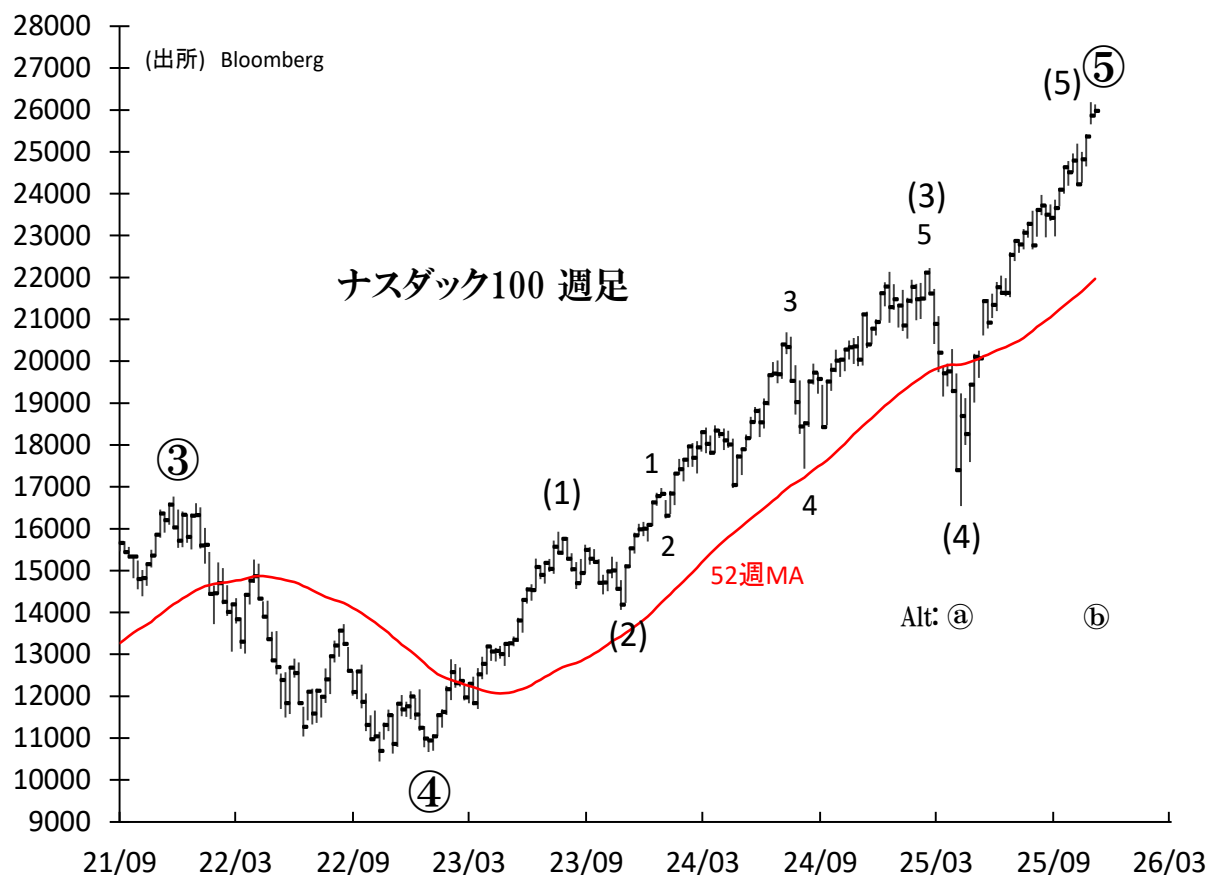
[ダウ輸送株平均] ダウ工業株平均と長期にわたる「未確認」が続いている



[マグニフィセント 7] 4 月からの上昇トレンドにおける最終波動



ナスダック 100



【ナスダック 100 週足 エリオット波動分析】

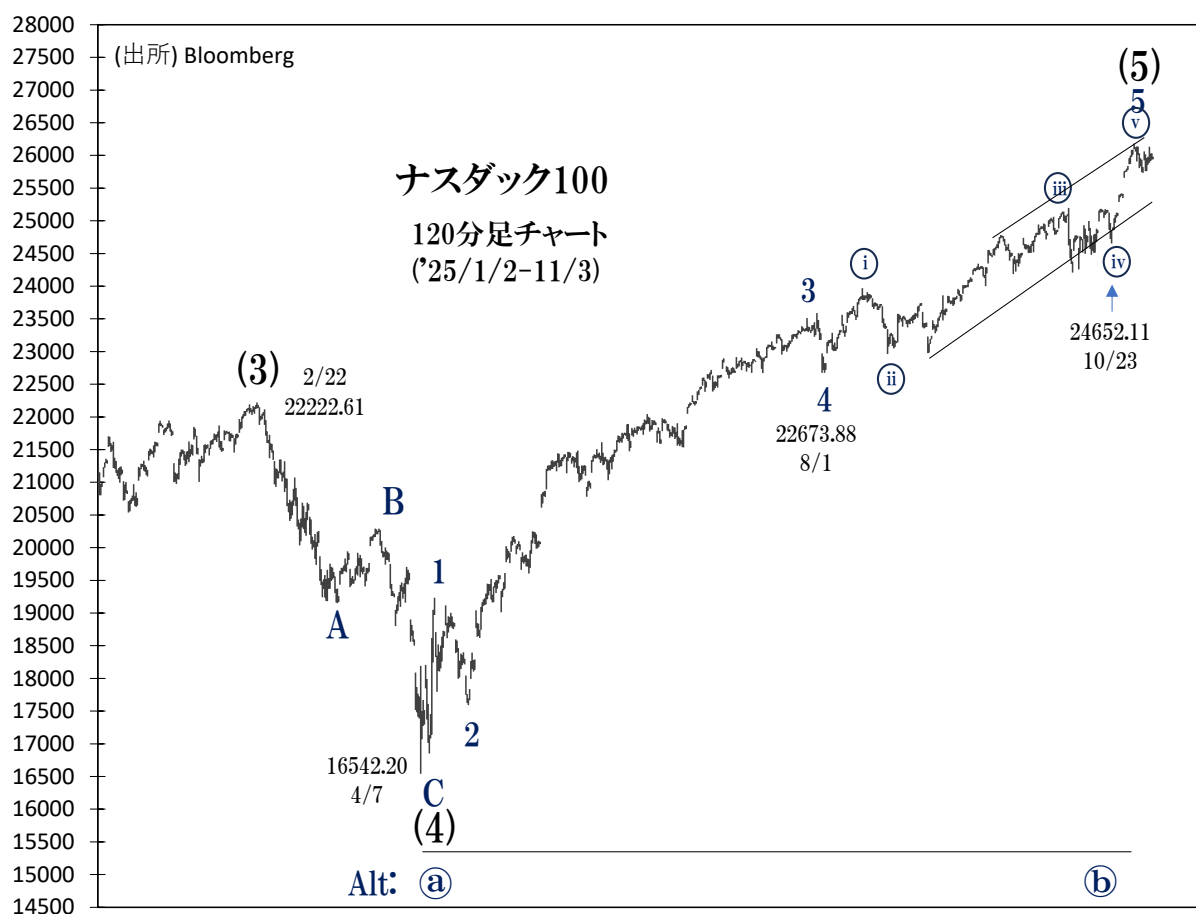
(プリファード・カウント)

4 月安値(16,542)からの上昇は、インターミディエイト級第(5)波の上昇に相当するとみられ、それはいつ終わってもおかしくありません。この第(5)波を以て2002 年 10 月底を起点とする、プライマリー級の 5 波動(①波～⑤波)による上昇トレンドはすべて完了することになります。

近いうちに調整局面が始まるとみられますが、それは数年間ターム続く、長く大きなものになるでしょう。

(オルタナティブ・カウント)

4 月からの上昇は「(ランニング)トライアングル」中 B 波に当たります。これは S&P500 のオルタナティブ・カウントと同様であり、遠からず C 波の下落に入る見通しです。これによると今後の調整規模は、想定されるシナリオではもっとも小さいと想定されます。それでも C 波の下げ幅は A 波のそれに対し 62%～66% となり、B 波の高値からは 3500～3750 ポイントの下げになるでしょう。



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

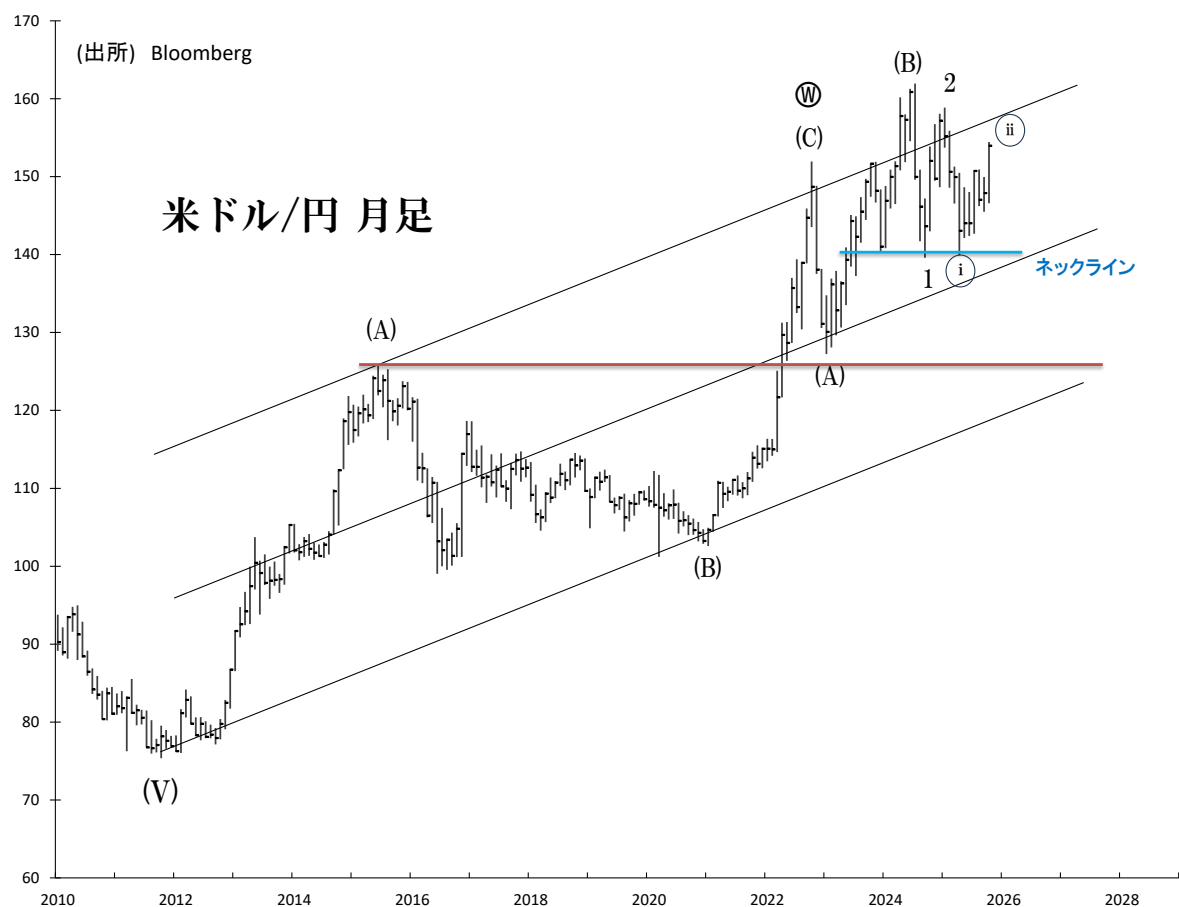
4 月安値 16,542 からのインターミディエイト級第(5)波は、その最終的な高値へ向かっています。

22,673(8/1 安値)からは、第(5)波におけるマイナー級第 5 波に当たります。さらに、24,652(10/23 安値)からの上昇は、第 5 波におけるマイニユート級マル v 波とみることができます。

10 月 29 日の高値・26,182 は、上値メドの[25,945](マル i 波とマル v 波が等しく上がる水準)を達成しています。

10 月 27 日のギャップ(25,418-25,656)を埋める下げがあれば、それは天井打ちの最初のシグナルとみることができます。

米ドル/円

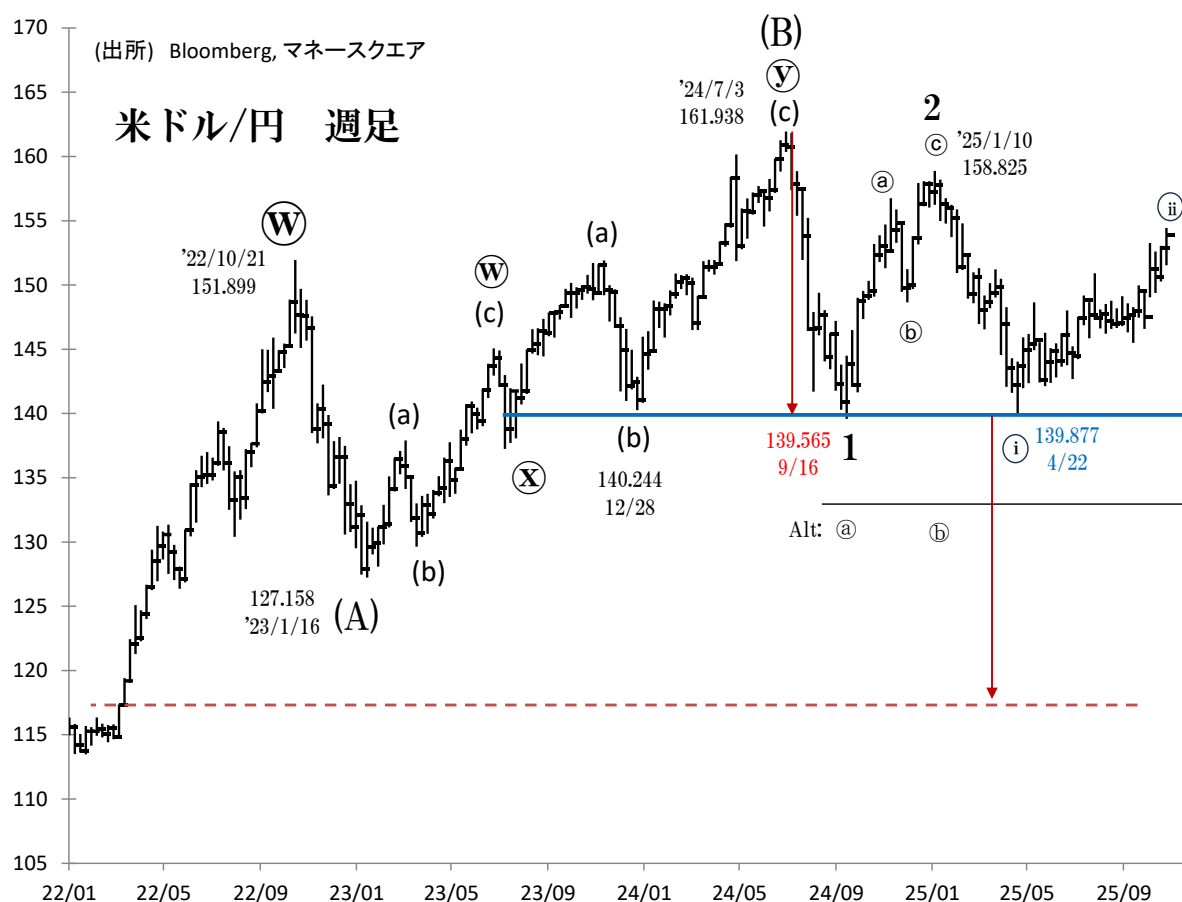


【月足・エリオット波動分析】

16 年半サイクルによれば、米ドル/円(ドル/円)は 2028 年 4 月頃まで「円高の時間帯」が続きます。この時間帯においてドル/円の上値は抑えられるでしょう。筆者は 28 年 4 月頃までのどこかの時点で、1ドル=125 円～120 円へのドル安・円高になる可能性をみています。

4 月下旬からドル/円はじり高が続いてきましたが、それも終わりつつあります。これからはドル安・円高トレンドがいつ再開してもおかしくありません。

おそらく 26 年前半にもドル/円は、139 円処のネックラインを明確に割り込むでしょう。それをきっかけに、「サード・オブ・サード」の強いドル安・円高トレンドが鮮明になるでしょう。



【週足 エリオット波動分析】

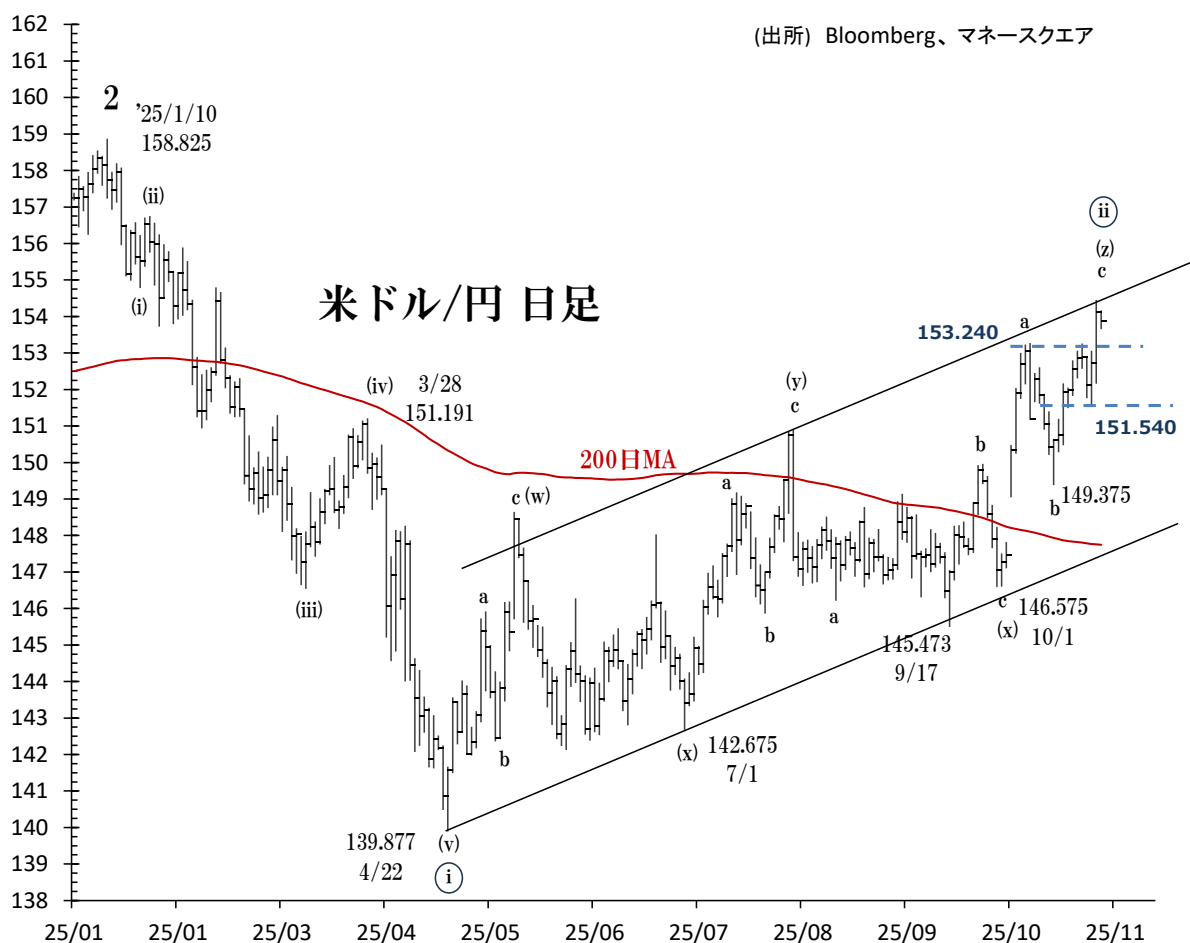
今年 1 月 (158.825 円) からは第 3 波によるドル安・円高に当たります。

この第 3 波を構成する副次波のうち、139.877 円(4/22)からの上昇は、マル ii 波に相当します。

これまでの筆者の予想 (1ドル=151 円～154 円を目指す展開) は足元で十分に達成されました。

ここからはマル ii 波完成後のマル iii 波による下落 (ドル安・円高) に対する備えが必要でしょう。

第 1 波と第 3 波が黄金分割(1:1.618)比率関係になると仮定すれば、[122.625 円]という目標値が得られます。ヘッド・アンド・ショルダーズに基づく垂直目標値は 1ドル=120 円割れです。



【日足 エリオット波動分析】

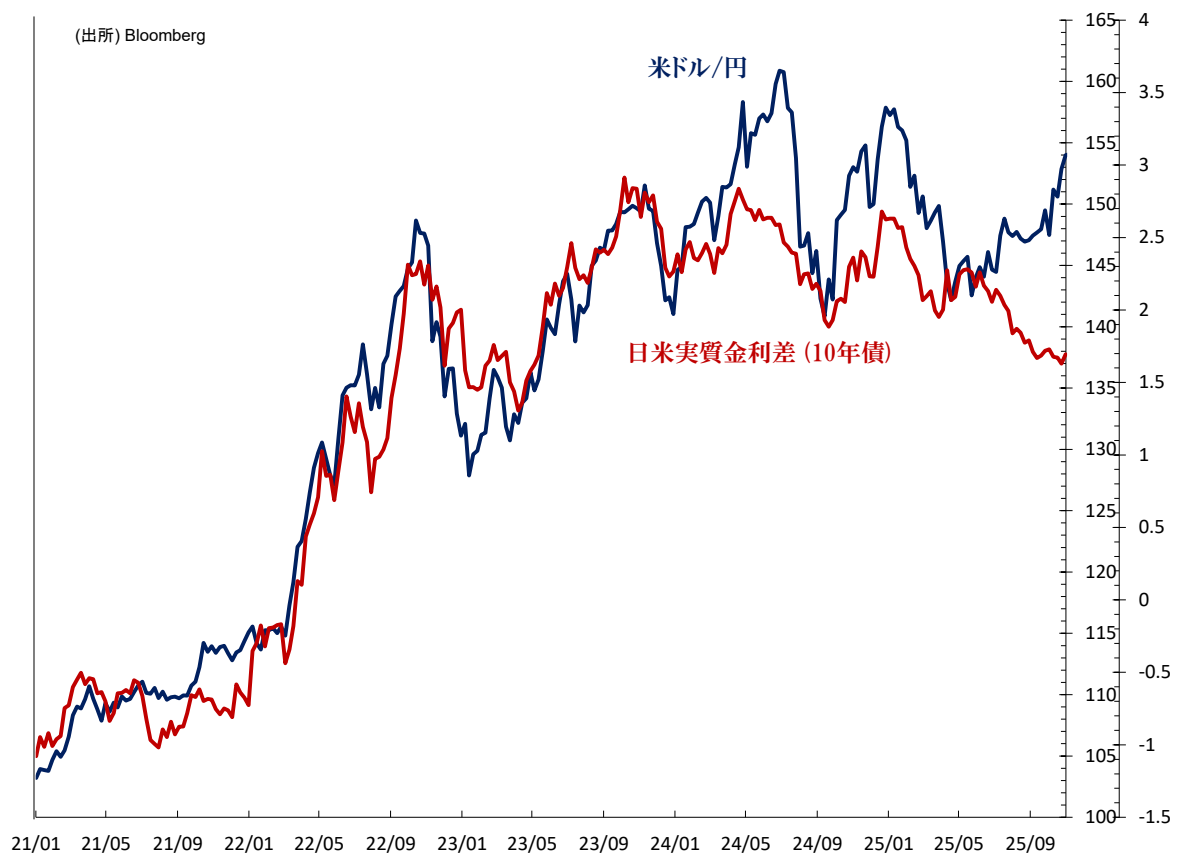
4 月からのマル ii 波によるドル高・円安「トリプル・ジグザグ(w)-(x)-(y)-(x)-(z)」は、足元水準で終了したか、しつつあります。10 月 30 日の 154.398 円は、1 月からの円高の 76.4%戻り水準[154.353 円]をちょうど満たすものです。

後述するように、ドル指数は足元で上値試しの局面を迎えています。この点からみると、ドル/円も当面はしっかりの展開が続くとみるべきでしょう。もっとも、半年にわたるドル/円修正波の全行程は終わりつつあるわけで、円高への基調転換は時間の問題と思われます。

今後 151.540 円を NY 市場の終値で下回ると、マル iii 波によるドル安・円高開始の可能性が高まるでしょう。そうなれば当面は 200 日 MA の 147.80 円処、さらに 146.575 円(10/1)を試す展開となりそうです。

金利差からのドル/円推計値

足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[140.349 円]です。



ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

A 波の最終局面(マル iv 波-マル v 波)と C 波の最終局面は相似しており(フラクタル)、A 波完了後の持続的なドル高(当時は 23 年 7 月中旬～10 月上旬まで 12 週間のドル高でした)が、再現されようとしています。

96.218(9/17)を以て、22 年高値からのジグザグ(A-B-C)は終わった可能性があります。

そうであれば、当面は C 波のドル安に対する 38.2%戻り水準[101.550]を目指すでしょう。

10月31日には99.844まで上昇し、8月1日高値・100.257以来、**3カ月ぶりドル高**になりました。目先の100.257を上回り、上記101.550を伺う可能性があります。

A 波終了後にみられた持続的ドル高(㊟波)は、A 波のちょうど半分を戻しました。今回も同様なら、遠からず C 波の半値戻り水準[103.197]に達する可能性があります。

もっとも長期的にはドル安(③波)基調は継続し、2026年には一段とドル安が強まるでしょう。

筆者は、ドル安^⑤波は短くとも 2028 年頃まで続くとみています。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
